



續飛家考人撰

中



5
2250
5



門利
辨 2250
卷 5

續佛家奇人後卷中

官司能順

故句當 竹内玄玄一遺編



能順ハ初小燈の文目之連秋小長トて世小獨歩以貞享乃
 帝元旦子昌之連分れ熱きむ沙威のあやうりむわふ清
 祝とたすりるを時たきする句「けさ初るや等れ海王色
 雲の水後ニ加賀大守の振きに意トく小松梅林院ニ由紀
 次免里以「毛蕉門初柳」くを居紙初少不雅談教初
 不まふある「連桃のたぐひめハかく毛也とあふ見不「秋風ハ
 芒打ある夕べうか「秋風ニ芒打ある夕べ中ノ二句と書く
 出以所遊バはとにこれ概名くくをけぢめを初これに翁
 も其持算に伏所遊けると元禄七年の冬翁の顔白く

命と續はと算り順いそく是より死時之世の強客候りたるよ
 年六十七小及びくハ旬も添くハ案はる夏成ごとく古人より
 極老れ他者ハ多く風流の劣りこゆらうにぞおちゆる式逆り
 われふ若ハ年六十と限りこちるはべし我も羨く侍ると実
 小及も堪能の人ハ凡夫の間他もべきたわらぬと尚時かたを
 わりこあむ

本因坊

本因ハ英流の國大垣人吟叟を師として風韻あり「早苗
 みく命のちがきこちせり」たまた大垣切子小んるハ長より
 妻小後れり人ハ「たまた新ハうらぐ」を死鏡ハか時ハ蕉翁
 わる人の會違あむ「蒜はほぐきに考とあがめてしとあがり
 「考れぬる花の積を」とあがりけるこ附よりしぐ尚時英流乃

本因坊ハ他たの物儀をればとて使ありあるハゆりせそ事を
 考く志はして同述けるは坊より蒜の難ハ考の居るは
 解め侍り「考れぬる蒜の積をの朝りよひ新と侍る斧の
 おこぞ算ゆるとまわりれ返去之れれば其和分の前せり
 他はあり「他たのあ旬附と同日とを志し「先ハ機
 精簡よりそそ日く屋ひきを菊も感せられし

天野桃隣 附 津尾桃翁

天野氏ハ伊賀上野の人蕉翁のつ子ハ壮業官を稱し
 江戸小来也「初ハ桃隣といひ後桃翁と改む右白堂又
 異竹朝とも号し「名桃や帯もからげあの色ハ六月るの心
 りや淡河大和河「たまた拾ひあつめて案山子ハ「初官
 やハ機嫌ハ朝の中その調流考すとい人の風格ハ元祿の

武江

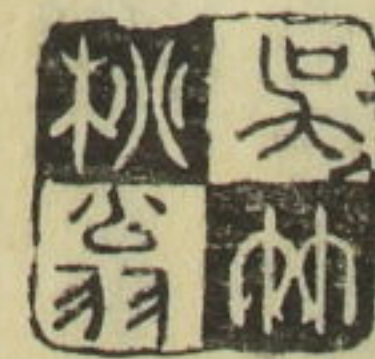
芭蕉社

木白堂

何の云 三音
清潤 有記押
略

紅葉如卷 歌仙

桃清改テ



桃

云

心伝と笑己る年月日

〜

うふふ〜 櫻ら何とるるあの中路

けり 先河箱江の清くまうづるとしては人を佐して後流の歌く
宿る旅店の女房その秋産雨不降ゆた二人の妻と出家なる
べしとちひぢは安産の符と乞ふ隣いとあはれみこととを画
符の一向紙出て巻しけるが中産平産の祝ひありて言ひた
ちにかくあ人を九折に箱江ふ何と乞はく〜しけるや隣さ
〜〜〜とく出くゆきとみせよ花れ見と箱江くあれは道
とゆきる若くと大いよ嘆羨あられ〜又いと〜き〜我〜
に賓客と餐食は〜〜〜人も〜〜〜招くる折や〜巻熱の
以るれ〜〜〜ふ手水祈と後け新き手拭ひとけ〜
客う〜〜〜後打よりて掃除は〜掛にき〜手拭ひ〜
毛見えび出いふとあはれ〜〜一あ日と色〜しけるあふ人の
許より礼文れあ〜〜末に〜〜〜手拭ひあ〜

とハ認免さりあれあくそこの偷児ハ忘れりこ
 漱尾氏ハ江戸柳系の日こりにあ先り初め秀和はあこび
 て杜格とありやが後桃隣の中に入海致し其後
 継ぎ大練舎桃翁と稱し「ひとひぢハ瀧のたづねや梅のむ
 「たぐゆき松も福むるや春のむ

逸人二川

二川ハ職中富山の産り先祖より代々其志に依ふは
 人つふハ江洲あやと控せむりとおのい或時をさく形ひあ
 ぐる小許したちあひあうく加勢たあうくむそくに羈
 止るれ計ありとすて俄ハ鬢髪と刺あわあ入たとなり
 その所と立去とそ一米とれる人ハ迹く花は香と我を乃
 隙子小去れあせり右守まんく慕の道て替もあくそはゆ

縁楊りりそ志と遂く免らる依く富山れやうみ一宇
 とむらび生涯と閑寂あくじらると

風士梅貞

梅貞ハ備前思山の人いけなきより徳社とあのみ十七歳
 の妻「山守や兵の操が二三本蕙翁ハ四行柳の後官古よて
 日向をきく志と感慨せられと又「かこよせて水もこせ
 たりう此つをこあど承どが辱々若やう真途おむを
 むく道時備前ハ一人の風士と失へることとまれ

瀧乃山

瀧氏は京都の人弱冠れ次より産教のつり入る教致して
 後ハ似船り後く控は下免蒙山向く芳山後ハ山也
 改む振鳩新と号し「反橋やあえく改むらあきこ「せ免

く魚の骨をふるはるる生身魂隠者を初ひく「紫がくれ
 にうゝ大きな花や冬核子紙先立ける人」一はぞ洞饅頭をそ
 毛菊みてもそを分れけけ六尺四寸疾く走るもの一日に数十里
 海に盤のわぶき尺餘うゝふれり夢れあゝねがやあぞり
 く神人として称せり

小沢ト尺

小沢氏ハ江戸小幡町の人吟使よりとくを更く孤吟こいひ
 も何邊の年うや蕉翁と我屋は至一うゝよりあれと後乃
 河に号ぶ一日河小幡改んゆをあふ垂ト尺と名けら
 家これ小沢の草字紙省略せられとるいとありうゝ
 向多きが中に一秋れ雲ハ富士紙いりく小幡をうり

無腸處士

其揚安士はト免送と業うゝうゝ難波あせめりそ人こあり
 名利うゝうゝ當世はたぐり自らうゝ外剛あり内柔ある
 あれ我姓と固く更く免揚れ号をあはしうゝ佛社の宗因の
 流と波こいとも又蕉翁の風と志うゝ一とせ家陶をせう田
 登に南橋ひるそそ一月お折ふ己がせありみあゝ蟹その蘇
 落うゝれあゝ一深く巻留とのまがうゝは耽り古記せども紙
 探り見はとりあゝとあゝ竊は佛士の秘符ある連袂の抄
 物れを授うゝ柱に膠一舟お刻めるもの獲きとくれひて
 也哉抄をあゝうゝ手おを波の梗條と志うゝ其綴と回
 びる若ハ寝ハずんばあゝうゝに實に後代の飛艦あるうを

竹下東順

竹下東順ハ江州の人其南う父之若うをうゝより医術をうゝ

ひたの産こせしが経なく本田侯より傳祿を以て妻子
 とやしあふ漸く老ふ當んとしり官路をいひて市居
 小替より御子とてのしんで批とさう次替はあつてはる
 あと十年あまうそれは吟櫃かみてせとうや「白魚や漢
 菊が蓋あひあひあづら一年あもゆぎれぬりのや年の暮
 蕉菊評しと云くは人江の隈田お生れく武の江戸お終を
 こけうやらび大隈の市の人あふべしと

後者吼雲

先祿下れ郊のしと秋の央水上の月をむと番子の沙漏を
 以て先く沱田河はあひと清光おしとさう各り他を
 ひらるに仙花が後者守田前といつるりの袖れうふ満ちて先
 などしとあつるが御とむにううびとまこれ一海成吐く

「名月ハ沙ああうるふ小舟なる菊をほく先法人の且うん
 且けちるく句他をば止めりそれより後ハ吼雲と渾名して
 守田前とハ呼ばせけること昔一後網船屋の江鏡と水
 上月とさる歌おさうし時田金より使お来り居し香竹の
 一そほりまうんとて「水やそそくや水ともんえりりび
 かうひてはゆる秋の夜の月ときあえしど目紙同あはるの
 後ありり家

發客九兆

九兆ハ加州金沢の人お出く医と業とハ壯業より蕉菊ハ
 就く後後義の撰お加りるは老の桃揚おのづう雅情あり
 「骨采の刈れあうも本芽うる」市中ハ物のむひや友の月
 「上ゆくと下ある雲や秋のそく」志づるや志本つむ家のまこ

わうり何れの以てや罪ある人へ悔どつり己もたふ獄にはあが
る暇多牢中にての吟「猪のそれ強さよ花のさるまじ
「かげろふのみも許さぬ風うたきく人泪を流さばとつふ
あとたうし初く死れあうしまうし縲綫の若と免る所進
どをいせとあさゆしとや思ひくは果ハ亡命しと終る所
と〜〜次

飭屋社國

飭屋本を清ハ尾張の人社國と徳名し菊菊丸と称し貞享
六年の表河翁は隨後〜と右井山お坐るた郡山お入る宇右
の部〜〜之傳の分仙あり帰り〜後河更もや罪あり〜死
刑お行つるべきに極原を以てお「蓬菜や油玉のかざり梅山と
吟せしと國主す〜免〜は威のあまう罪一考と減〜と回玉

伊良古橋おわがける歳程もあくそ西よと流るこれハ昔子
がけ人を悼る句れ〜と云お伊良古の社國例あ〜は失るはし
紙人より申しあ〜け〜〜翁もむつ中〜と〜と〜と
見附〜〜とたづひなれらるむ〜と思ひて「羽ぬけ
鳥鳴喜ば〜と〜と〜と橋

山本荷分

山本荷分ハ尾張名古屋桑名町は僅り檀木堂と號し蓮門
の名士〜年中行交供屈蘇白散「い〜けあや屈獲をわ初
る人次才表日奈「と〜毎日々居の友のつがみ〜る石清水
臨時奈「皆〜もあ〜ふか〜ん橋〜の灌佛「け〜れりや次
手小洗ふ仏〜ら橋本「面瘦〜萎附〜る發うは〜〜〜絶葉
「打わけ〜絶以束を中〜と〜此乞巧眞「若菜より七夕系ぞ

おほえよき駒迎「は免髪も旗の波や駒むく撰出「系の
紫や馬のつれづれ「紫十月更夜「玉袋の夜ぐくし帰をむ
五節「ゆい娘小鏡とび指紙折ふり追灘「おつれてや振り
まぐも鬼の面大ひふ其他も流る抱るに晩季河筋の物
糸を蒙り「橋ちとつふ世と世通るよりおられまいと口を
しきりみちしりや

宮崎前口 附此筋千門

宮崎氏「澁州大垣の人致仕「「佛名を東字といひ後小前口
こころ里蕙門のむ成之「畔ぬや蕙あり流る流連河「鳴乃
まや螢も夜の足燈は光「庭木の庭ふつ「や初風おとそ
室扇の繪ふ折ありおのり佛社あり多し「班女が能を蒲津ら
ひあ道らそ古手の折ぬきあれ中も去る取よは免る法河の月

に揚紙所「くくべと云くりけりはく産ハあり「上法中法
ハ月の形おくれぬ合息も迷惑くいま當流のを及ハそそバ
の突り舞い「ある人も一串は陸梅より「賛しといそく
「味嘗つけくわづれはよき室扇うかま子此筋子川
風流あり折長の暮りく「よ「や君才はくちもある橋
此筋「燐火おハ意本小折炭とあそきけ千門

枕翁本筋

本筋「江州大津秋おは免り「あうを「以より蕙翁の門
裡まへく「枕翁と号し「花さくもむつう「げある老本此
「名月やよひハ女の夢げり「禪ハ竿おかせつ冬ありを
其卓見おひべ「芭蕉友古交ふ本筋「十月十日薬
り依依子打寄り合ひをけ免け道と梨実とのそ好く終ふ

菊うゝ制一け進ど志死す不守きたあふ夜をむくは後えは
あまは進む一片味ひて危れ治ふ菊いそく脾胃うくる水
あし死ねらう死ふありこ是菊の病底は作りてを深切化
人かあえさるる身を悔く知べし

僧李由

李由字買年律州小任以親名して亮隅上人といふ近江の
聖田小任職以庭小田根の梅と極えたる茶子とりてはゆこ
といふ友小田梅庵の号あり蕉の小抄ひて評六支考等と友に
著し教句論と無せり「枕や病氣かさゆるは代の巻一とる
をきこ三年みその名抄うまけ僧より先菊の風流と志すふ
ととども之味後初の抄うまれば公なるはもおとさし一か味
の法と極されし法用とらひあし一様立しと菊の危と初進

一より少才のちぎり深きゆみよの私に侍ある如しあも
あく菊の幻恒菴小容居の抄を幸ひ志死りに三時の切とつこ
て佛子を耕し終ふ其佳境に入しと之菊粟津小病は以ち
法の少れ幸忌と物ひるとそを際終よあははと六支えし室
永二年小寂以年四十六

磨工牧童

牧童ハ加州金沢の人削刀の業とりくむるのたつきとハせり
才小枝と蕉の小抄ひて中にその妙境小入る「故けられきハ
ほのくしみうの月一轉落をゆりしそしと兼書や支考
おれが為小傳して云く牧童ハ被が兄にしと北枝ハはが才也
素より耐公が才能と事ハは進ハ嘗て院家の留書とも是才
は略むしハ梅菊の風流と志しひけるも中江蕉の小入て時の

雅ふあそびるんおたりどかびたえんバツ葉に生えぬるを乃
 被ハ梅のむの清きに嚳りおれハ却のむの曇れるふよる略吟
 席定會おれ人とあふびといふあとなり時居眠り被臥く
 生涯の泣物こそせり略貴ぬもあれとんるこ一守明もあれと
 許したまひ終り兜卒の内院不寐むらんをぞ言あうる
 御南菊うめく或法師おむひて牧童ハよ此考と申さ進
 一はよくて悪うんやあ一くてよううやま菊翁あう
 てハあ一どか一物ハ生えハ光あるくも夜佛ハ後たり
 んといふむ一此人のをえ二人ののハ御てやゆん牧童考
 一といで我そのふみ菊はゆえん一時或の素子堂が一浮葉
 本紫去の蓮風情はきたうむといふ向れ物ううりに及ぶ是ハ
 一おのれんと音にく唱たうんがう一ととくられ一おハ何ごも

見え侍うばと時の人あれと俾しは小人ハ人のをうひあり
 てはうぬ涙もまたううううのゆらん初あうれまある人ハ
 世小考一これハ老の飯あえうむむ人ハ乳をの胃に於て
 風雅も危ううびといふべ一

瓢水居士

播陽の瓢水ハ人にあうれ一留家あれども佛子ハ金銀と擲
 一後ほぐ一ううも公にけぬ大丈丈一留妻亦或一
 の元旦は「かつちうと打火れおハ去季の物」流るや我抱
 籠ハあ一山一婦みぬのご置うて暮やうこの秋を介調る
 おとああべ一平生あ一き人の雅波の輪女を根引せん
 云るをいれ光く一ふふもあをりう燈におけ蓮花葉或
 人ハ達磨の賛あをれく一就以蓮ハ花も葉もは山れいを

と一老て佛社の名手とせえは西へ居居する時「けー
炭も袖味噌にけきうく猪のくちあみくくの佛人おあは
ごりりり」扱ああの月が鳴る時温故集おハ藤風とあり不審
瓢水初名藤風と云ふる不知
の海かの大匠どの古あより名匠く玉妙之或は初句
一あ名とせして蕉翁と一其南とあはハおぬ老のいつもく
采田子おゆぐりてあくハあるさず

白馬散人

ふるハ播州加古の人佛社の意風と好く上る之める元朝一
「鐘撞のあくくやるはさうなる古今を凡人いもと云はる所と
称はべ一「隠れ家はすぎく」故老のうかりなる「朝歌や明日
とちとせれ牙ごくく」目れ糸と所くしてハ干以時ある一切
衆生悉皆成仏のあらんを「盗人の銭をく雲の屋よりやいづれ

の事や和のくく人出たる以殿上人の初あれ遣お備ひくれ
く教向せよとやせしに「荻荻の中おまぐく」振よおれ戒
と此張繼が夜泊の初れんとと守せられく「撞橋かき余おれ鐘
きく霜夜うると其餘情をあはさる被麦林う教亭ふ乃初
のふは「采田子も淋しひう飛で初と縁さるといつ遊ハ
優劣あへきやけ人あうを一時笑しかりしも巻ての後ハ
願る家りけりめむとれ子娘りするに妻死しとも先でをや
一けるが子娘りする子就お去くと佛社ハとくはて出敷
の二道とゆかりをるやうな人となし以畜へ重なる數十
金と出しく田代とあひて興しとつふ色や一多の暮乃
程あふ「巻とあくくわさる祝子の大振引いづ道々表ああ
でもの心きと隠者日似りぬ述懐と適時評きく子とあふ

の有りたるよしと後うを人の初りしと

稻津祇堂

稻津氏の稲波の人には、先乃不入一時的青流と俗名をかりし
しより、其世に耽り又行文をもたし先り多きとより、諸國
と種應ひるの志いでさくゆづ、皇州早雲寺ありし、宗祇法
師の墓前、移り發せし一切を入るしと、あれより祇堂と改む
その時の偈、七顛八倒五十二翁蓬頭薙卻明月清風と又り、小
「我が世もみあつきの石の上、蓬小東、奥羽城の名も、折し一か
りし、江戸にて暫く、深川に住居し、梅屋の口、辭「森ねくまる
るにおそつ、紙子か、梅屋交へ、ゆりやを「梅はうりも紙
ひく、經の巻ひも、女達磨の画賛を好まれて、そのらんからか
らんがと、梅屋しと「九年、何若界十、けああらも、妙真寺乃

大に深川ありと、すくし、深意よりか、りしと、深く、貴
嘆せし、れしと、後洛北、紫野あり、先り、以、散雨、江戸千、り、和日
混、こ、ふ、世、り、紫野の、教、有、と、り、は、先、之、晩、事、浪、華、より
江戸へ、あり、む、の、途、中、若、根、湯、本、の、里、小、か、い、と、段、八、享、保、十
八年、四月、之、遣、偈、に、舉、手、動、足、平、生、神、通、鍊、牛、破、裂、音、信、不、通
世、を、釋、け、る、の、粗、か、一、お、れ、世、と、お、ぬ、り、し、と、死、ね、る、を、り
北、獄、津、づ、の、極、楽、と、助、その、門、人、併、と、祇、法、師、の、墓、を、造、り
た、と、玉、首、山、人、と、追、号、し、又、臺、と、深、川、八、幡、社、内、小、ゆ、り、る
と、り、門、系、多、う、り、中、に、江戸、より、四、時、款、と、稱、し、る、説、ある、り
長、せ、り、い、と、り、る、祇、堂、祇、の、衣、邦、堂、隨、魚、費、と

長谷郡柳居

長谷郡柳居、江戸の人を、危く、宦途を、避て、閑寂、小、く、り、る、を、り

向ふのありわひ詠社の跡をたぐききく意箱の風洞
坂のあり「青柳や二筋みはらを木より」芥子畑や我物
あつらひ思ひ足「淋し雨の極意は妙なり」宋吟巻心くせ
その名の舎炭小端ん子とるれい馬光等の六人と組
再び意風小端きく先んとい是と大色書と号はを地
ひり判者ご成て四吟の奇他六曲とあり各自小舎玉の光り
ありく一時世人を驚嘆せしむ或時江戸に名取と程免とる
とて飛井戸より「反橋のはれを雨く鳴かそは本中川茶
味うく」葉の花や古寺の及目のとくひり佃島より「拾ひ
より」あはれより「花三回りあり」首代小案山子と
現に守り神又を立、旅せし一巻の中と志や「忘て改
屋の中あど多おとに河街の癖ありしも晩多病うらはて

病中の此の多うり枕中引あり居るハ延享丑れとりの
妻もそ有るあり「原祝よりせ旅の日記うたぐ獨居の筆を
あすむと筆紙揃くいそく花の盛りは僅し七日ぐりと終
しむその間のおとせあそ日記しそえむと略十三日終のころ
あつらひ思ひ足「淋し雨の極意は妙なり」宋吟巻心くせ
はるす十ツ時より風はつる「花もさや蒲室のくも葉井十六
日終あはれなる屋より「後風あり」ハツ時過ぎまする雨降いづふ
「けふさうしそまの山居や花を友十六日夜来風自夢志行
まろく曉より「晴更しはれより」「晴もその羽衣ありて花一本
十七日はるす夕のより風が「いづ」むよりあふんそく妙なり
や庭の若十八日ちるす「あはれ来く「津猫はらび」「傀儡師
十九日終更かり「田舎よりはれハツはきより風吹し」あは

花をわびく強きそ松の夢日本橋のわたり浮世小浜小松露
庵をいとあそびて今あましくを跡くえざるも是の老が佳なり
けや

大雅堂 附妻玉園

沈野秋平名ハ無名字ハ貧成系師の人画名古今をかり大雅こ
号一丸霞山樵ともいふ東瀛子あましく大雅堂ハ名張むほふ
きぬき之知命の妻の家止よ「いくはトやとこは是て片手あ
けれ妻芳抄より抄学の次」葛粉ゆらけあまを花れ志げく
かかちのちねが初る人せれこと妻玉園ハ滋山氏此女画とよじ
和分とあのかるうた小葉一うれも矢操りくくく妻不依ふ
ゆれハ主婦衣とたがひうくく魚むあとなり一或は此史海うう春
と求め来りく共ふふのむ妻裸うあまを琴を弾けりといふ

朝な

おぼ

まよ

の山

むよ

ほく

まの

ひらり



大雅堂

妻玉園

大典祿昨その暮遠小玉瀾配夫行と去れりも是等此類を
やりのあるべし

泉石老人

泉石の浪遊の人たふ好む結やう以「ついきけなきこちり庭ハ
梅ごうけ「真冬平玄田角之菴此月」奢られて又まじら
紙子うる曉平乞食とんく「秘述ハねをあのまもむく
寂心と性つ子小洒とたみく物子拘るるは或時酒がふ
と獨去く「飯朝のひとわくくむ身のみう一とはやまる
哉弟多先生博多蔵より書法も達せられ一あ
その次刻くざり者ありしとく桃社又その猪仔なるを



續徳家奇人談卷中終



